



地場産業から まちづくりを考える



- P2 地場産業を地域資源と捉え、
市民協働のまちづくりを
- P3 高島ちぢみをまちづくりの素地に
- P4 高島ちぢみの歴史と産地としての特徴
- P5 高島産地の課題／あいだを「縮める」
- P6 産地とまちが交差するストーリー
を構想する
- P8 活動を終えて



地場産業を地域資源と捉え、 市民協働のまちづくりを

高島市は 2015 年から市民との協働によるまちづくりをめざして、高島市まちづくり推進会議を開いています。私たちはその第 4 期の高島市まちづくり推進会議の募集に集まった市民委員です。少子高齢化、雇用創出などの地域社会の課題や、住み続けられるまちづくりに、市民協働の視点から何をすべきか、何ができるのか。2021 年から 2 年間、現場の視察や関係者へのインタビューを踏まえ、検討を重ねてきました。そこから生まれたアイデアを多くの方と共有しながら、これから少しずつかたちにしていきたいと考えています。

まず、高島市には、住んでいる人もまだ気づいていない魅力がたくさんあると、私たちは思いました。たとえば、季節で彩りをかえる琵琶湖や山々、広く高い空は、まちがいたくなく高島の大きな魅力です。自然環境だけでなく、そこに暮らす人々のつながりや、暮らしの中で育んできた伝統的な地場産業も、身近にありながら、多くの市民には意識されていない魅力ではないかと考えました。

今はインターネットという便利な道具が発達して、どこに住んでいても魅力的な商品や情報にアクセスできる時代です。その便利さの反面で、自分たちが暮らすまちへの関心が薄れているのではないか。そこで、私たちはあらためて高島市の地場産業を地域資源と捉え、その魅力を市内に向けて伝えることが、市民の視点を活かしたまちづくりの第一歩だと考えるようになりました。

それでは、地場産業の魅力をどうすれば市民に伝えることができるのか。私たちは地場産品を手にすることはもちろんですが、まずは、市民が日常の暮らしの中のふとした時間や空間で、地場産業の存在を目にする機会を増やすことが必要だと考えました。さらに、ものづくりの現場を見学できる機会があれば、より印象的に地場産業の魅力が伝わるのではないのでしょうか。市民が「高島はこんなええもんがあってええまちや」とうれしく感じる瞬間が積み重なり、そのよろこびが家族や友人に伝わって広がっていく。地場産業の活躍が市民に伝わると同時に、市民の活動で地場産業を応援する。地場産業が成長する時代のまちにあったであろう、活発なコミュニケーションや関係性—それが住み続けられるまちに、今、求められているのではないのでしょうか。

高島市まちづくり推進会議（第 4 期）「資源の再確認と活用」グループ

高島ちぢみをまちづくりの素地に

地場産業を起点にまちづくりのアイデアを具体的に考えるために、私たちはまず、老若男女を問わず、広い世代に届けることができる日常品という理由から、高島ちぢみを対象に選びました。どうすれば、高島ちぢみという地場産業の魅力と高島で暮らす魅力を、市民に一体的に感じてもらえるでしょうか。

たとえば、高島の自然の魅力―琵琶湖の青や田んぼの緑を染色で表現するというアイデアはいかがでしょう。高島ちぢみの特徴は、糸に強い「撚（より）」をつけて布地の表面に「シボ」をつくることで、肌にふれる面積を減らす工夫にあり、高温多湿な日本の風土のなかで、その快適さが好まれてきました。その着心地だけでなく、高島ちぢみを育んだ高島の自然の魅力を視覚的に表現することで、地場産業の魅力を伝える。

あるいは、製造工場の見学や、生産過程で生じる布きれを活用する簡単なものづくりの場を、生産者の協力を仰ぎながら市民が中心になって提供するという企画はどうでしょう。実際に高島ちぢみに触れた感覚や手を動かす体験から、商品開発のヒントが集まるかもしれません。赤ちゃんの肌にやさしい製品を求める母親の声や、今なら SDGs に関心の高い世代の発想を、生産者に届けることができるかもしれません。市民の声が商品開発につながることで、地場産業がより身近な存在に思えるのではないのでしょうか。

衣服の素材以外の使い道を考えるのもおもしろそうです。門戸に飾る暖簾や空間を彩るタペストリーなどのインテリア製品があれば、市内の飲食店や企業、公共施設と共に高島を彩ることができます。醸造業などの他の地場産業にも利用してもらえる製品やコラボ企画が実現できれば、高島の産業や文化をより印象的に発信できるようになるでしょう。高島ちぢみを素地に、市民や企業、団体がつながることから、まちづくりを活性化させる新しい推進力が生まれるのではないかと、私たちは期待しています。

このように、いろいろな可能性があること―それが経済的な豊かさに隠れがちな、まちの大事な魅力だと私たちは考えます。高島ちぢみにはまだ実現されていない可能性がたくさんある。そして、高島という土地も、一人の人間が何かを新しく始められる余白が多いと感じます。たとえば、若者が地場産業の発見をきっかけに「こんなことをしてみたい」「こんなお店をつくりたい」と、自己実現の可能性に結びつけてくれたらどんなに素晴らしいことでしょう。自分とまちが共に成長できることが高島の大きな魅力であり、そのための素地の一つとして、まずは高島ちぢみにある発見と創造の余白を、多くの市民と一緒に探していきたいと私たちは考えています。



高島ちぢみの歴史と産地としての特徴

高島は、ちぢみやクレープ、あるいは楊柳の別称で知られる綿織物の産地です。『高島織物史：全』（八田良一編、1975年）によれば、高島ちぢみの歴史は少なくとも江戸時代までさかのぼることができます。雪の多い高島の地で、農閑期の副業として機織が営まれていました。京都から買い入れた綿花で農家が糸を紡ぎ、手織られた縮布が大溝港から大阪や京都に運ばれました。消費地に近いことも有利な条件ですが、製織に適度な湿度が必要なこと、また、晒や染色に水質が影響することから、質のいい地下水に恵まれた高島は繊維業に適していました。

明治時代になると、生産者の組合や模範工場が生まれ、技術の伝習や品質検査、規格の統一など、品質向上に努めた結果、明治末期には「高島縮」のブランドが確立します。大正時代には国内でクレープが流行し、高島クレープの名称が定着しました。明治・大正は産業近代化の時代で、高島縮も機械力の導入と軌を一にして、家内制手工業から工場制への移行が進んで生産性が大きく向上しました。技術的な革新だけではなく、近隣県から雇い入れた多くの女工が、労働力として産地を支えた史実も重要な側面です。

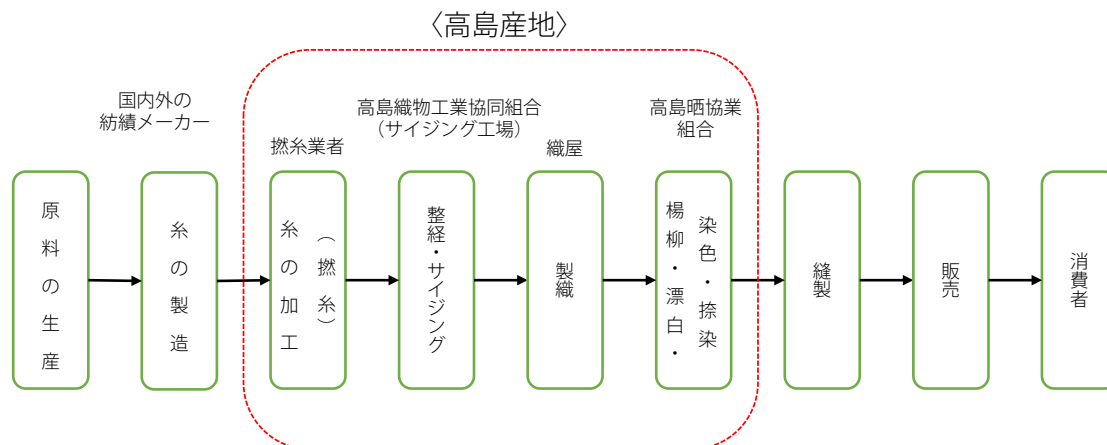
戦後、高度成長期はクレープ素材の肌着に高い需要があり、高島ちぢみの生産が最盛期を迎えます。当時は学校を卒業した若者の「集団就職」が時代を映す言葉で、高島も織布工として西日本各地から集団就職の若者を多く受け入れていました。まさに“繊維のまち”として活気にあふれていたと回顧される時代です。ここであらためて強調しておきたいのは、高島が「産地」であることです。1954年に高島織物工業協同組合の加工部として晒加工工場が新設され、撚糸から製織、晒加工まで一貫する生産体制が整いました。原料の生産から衣服の縫製・販売までの一連の工程において、織布の生産と供給に特化する産地としての基本的な特徴が確立しました。



写真：高島織物同業組合模範工場（引用は『滋賀県写真帖』明治43年）



写真：高島晒協業組合工場



高島産地の課題

昭和 50 年代以降、消費者ニーズの変化や、円高、国際競争を背景に、高島ちぢみを主力の製品とする高島の産地は縮小の局面に入ります。肌着用クレープの生産はピークの 3 分の 1 に低下し、昭和 60 年代以降は中国から輸入を背景に生産量が減少、平成のあいだにも織屋の廃業が進んでいきます。現在でもクレープ生産のシェアでは全国トップクラスを占める高島産地ですが、その課題は、高島地域地場産業振興センター発行の『市場実態調査（繊維産業）報告書』（1990 年）や『織物素材の開発と市場調査』（1996 年）などに詳しく書かれています。報告によると、下着・肌着需要の減少に対して、「クレープ生地へのプラス α の工夫」「素材開発のための消費者ニーズの把握」「少量多品種生産、クイックレスポンス体制への対応」「製品メーカーとの共同開発等への積極的な取り組み」が課題としてあげられています。私たちが実施した高島晒協業組合へのインタビューでは、上述の内容に加え、人材の確保・育成の難しさも話題にあがりました。



あいだを「縮める」

高島ちぢみの歴史を紐解くと、成長する産地にさまざまな人のつながりがあったという側面が、私たちの目を引きます。たとえば、農業人口が大多数を占めていた江戸時代に、縮布の生産が農閑期の仕事として始められたことは、高島の風土や暮らしと機織のつながりの深さを教えてくれます。明治・大正・昭和を通して繊維産業が近代化していく過程においても、兼業というかたちで撚糸や製織に従事する人が産地を支えていました。家内制から工場制に操業が変わっても、家族や親族のつながりで経営を支えてきた側面があります。また、同業他社が集まって組合を立ち上げ、生産工程の一部を効率的に集約する。織屋のなかで親機と子機の請負関係を結んで生産力を総体的に高める。あるいは撚糸と製織の分業と集積によって産地としての基盤を強化する。産地が縮小傾向に入ってからでも、創業者から 2 代目に、3 代目へと企業経営が引き継がれる。けっして規模や生産能力が大きいわけではない個業が、綾をなして発展を遂げてきたといえるでしょう。

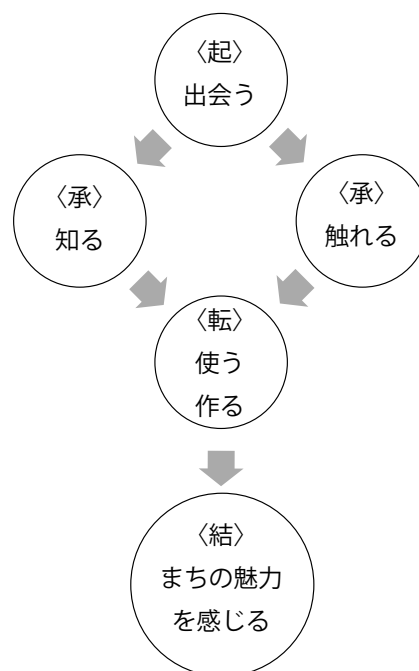
産業構造の変化や生産手段の近代化・合理化の時代の流れのなかで、工場や従事者の減少が続き、往事の高島にあった産地の多様な綾も失われつつあると考えられます。他方で、高島の暮らしの変化に目を向けると、人口減少や少子高齢化のなかで、住み続けられるまちづくりにも人のつながりが大事であることが、あらためて認識されるようになりました。人のつながりという側面に注目するとき、かつての産地にあった綾を失うのはとても惜しいことだと感じます。そこから、高島ちぢみと市民の新たなつながりを取り結ぶことに、まだ十分に想像されていないまちづくりの可能性があるのでないかと、私たちは考えました。

高島ちぢみと市民の多様なつながりをどうすればつくることができるか。市内における高島ちぢみの知名度が必ずしも高いとは感じられない状況と、織布の生産と販売に特化してきた産地の特徴とは無関係ではないでしょう。生産で結ばれてきた関係性に加えて、新しいつながりを市民と結ぶには、まず、高島ちぢみと市民とのあいだを「縮める」ことから始めなければならないでしょう。地場産業の振興に取り組んできた行政だけでなく、市民活動の側からも手を伸ばすことで、新しい綾に支えられた産地とまちへの、長い変化の一步を踏み出すことができるのではないのでしょうか。

産地とまちが交差する

ストーリーを構想する

高島ちぢみと市民のあいだを「縮める」ための取り組みとして、私たちが検討してきたアイデアの中から、消費者として「買う」以外のかかわり方にしぼって紹介します。市民が高島ちぢみとつながる行為には、〈出会う〉〈知る〉〈触れる〉〈使う〉〈作る〉があると想像しました。市民と地場産業のあいだを縮めていくきっかけと展開を構想するための考え方です。起承転結を意識して右の図のような展開のモデルを想定しました。〈出会い〉から始まり、〈知る〉〈触れる〉ことから、次に〈使う〉〈作る〉へと体験を進め、最終的には市民が産地としての〈まちの魅力を感じる〉ようになる。もちろん、このプロセスのなかで、高島ちぢみに愛着を感じて、商品を〈買う〉という行動も生まれるでしょう。このようなプロセスを企業と行政と市民が構想として共有することから、地場産業の振興とまちづくりが交差する一体的な取り組みと、市民が体験するストーリーが生まれるのではないかと期待します。



人生の転機に小さな贈り物を

入学や卒業、結婚や出産、高島への移住・定住など、人生のターニングポイントに高島ちぢみの贈り物が手渡される。そんなふうに記憶に残るタイミングで高島ちぢみとの〈出会い〉を演出することで、まちの魅力を印象的に伝える。贈り物は暮らしの中で使えるものがいいいでしょう。提供する側の負担をおさえる意味でも小物がよさそうです。たとえば、コースター、ランチョンマット、おくるみ、よだれかけ、シーツ、ハンカチなど。それが“ふわり”や“さらり”という心地良い布地に〈触れる〉瞬間につながります。贈り物に高島ちぢみに関する情報や企画の案内を添えることで、〈知る〉きっかけに誘うこともできます。



公共的空間に飾る

現在、市内で高島ちぢみを手にしたり、目にする空間は、道の駅やたかしま・まるごと百貨店、ショッピングセンターなどに限られています。公共施設も高島ちぢみとの〈出会い〉の、高島が織物のまちであることをアピールする絶好の空間です。たとえば、市役所の壁面に、琵琶湖の青のグラデーションに彩色された、大きなタペストリーを飾る。図書館の郷土コーナーに、高島ちぢみを貼った「ファブリックパネル」を展示することで、市民が〈知る〉〈触れる〉機会を提供することができます。



市民を体験企画に誘う

多くの市民は商品として高島ちぢみは知っていても、その歴史や風土とのかかわり、産地の発展を支えてきた、そして産地の今を生きる人のストーリーを〈知る〉機会は少ないのではないのでしょうか。商品としての魅力はもちろんですが、市民と高島ちぢみのあいだを「縮める」ための、いろいろな体験を企画して、市民を〈出会い〉に誘うことができるでしょう。

たとえば、工場見学のツアーを定期的を開催する。生産者から生産工程を学び、市民のなかから募った語り部が歴史や風土との関係を伝えることで、高島ちぢみを深く〈知る〉体験になります。あるいは、高島ちぢみの端布を使ったものづくりの体験教室を開催して、市民に〈触れる〉と同時に〈作る〉機会を提供する。高島の高校生に、道の駅やお店などの、高島ちぢみの陳列を考えてもらう企画も、地場産業を学び〈知る〉体験になるでしょう。高島ちぢみの魅力である肌触りをもっとも強く感じられる夏場に、高島ちぢみのTシャツや浴衣を着て、湖畔で夕涼みするイベントは、高島の自然の魅力の発見と合わせて印象深い体験になりそうです。酒蔵訪問やまち歩きをすれば、まちの歴史や文化への関心を高めるきっかけにもなります。



高島ちぢみの暖簾（試作品）

撮影場所：ホテル屋

まちを彩る

高島ちぢみの織布には衣服以外の使い方も考えられます。たとえば、門戸を飾る暖簾や壁面に吊すタペストリー、カーテンなどのインテリア製品に、また、コースターやクッションにも使えるでしょう。

市内の飲食店や企業などと協力して、高島ちぢみでまちの空間を彩る仕組みができれば、高島の特色をより印象的に発信できるようになります。日本酒や菓子箱などの商品を包む風呂敷や包装材にも使えば、醸造業などの他の地場産業や高島の文化の魅力と一体的にアピールすることができます。

活動を終えて

高島市まちづくり推進会議の2年間の活動を終えて、あらためて思うことは、まちの豊かさは身近にあるということです。その豊かさを感じさせてくれるものが、私たちが地域資源と捉えた自然や地場産品です。それを発見したり、手にとったり、自分からかわりをもつことで、まちの豊かさを実感することができる。今回、私たちは高島ちぢみをテーマに選びました。限られた時間の中で、ほかにもたくさんある魅力的な地場産品にまで検討が届かなかったことが心残りですが、私たちがめぐらせてきたアイデアは、他の地域資源の可能性を検討する際にも参考になるのではないかと考えています。

高島ちぢみを取りあげたことで、私たち自身も深く知らなかった、糸や布のつくられ方や産地としてのまちの姿を知ることができました。モノの魅力だけではなく、それを作り続けてきた人々の存在を意識するようになりました。そして今、製織の工程がまちづくりに似ていると感じます。糸を撚る、縦糸と横糸を交差させて布地にする。そこから、暮らしに合わせたデザインや機能を考えて縫い合わせる。たとえるなら、市民一人一人が糸であり、それがよりあい、つながることで高島というまちの素地になる。そして、時代の変化に合わせて、住み続けられるまち、居心地のよい空間であり続けるために、新しいつながりを結ぶ。

私たちの提案が、高島の暮らしの豊かさ、そして、未来の高島の姿を見つける糸口になれば幸いです。

市民委員

大久保 亮平

大杉 千晶

滝田 大

中田 光優

コーディネーター

王 智弘（京都精華大学）

小野 聡（千葉商科大学）

高島市まちづくり推進会議報告書
「地場産業からまちづくりを考える」

取材協力 高島晒協業組合
つながる麺屋さん ホタル屋
編集 高島市まちづくり推進会議（第4期）
「資源の再確認と活用」グループ
発行日 2023年3月25日
発行 高島市役所市民生活部市民協働課
〒520-1521
滋賀県高島市新旭町北畑565番地
TEL：0740-25-8526